



教科書に込める思い

ありがたいことに、教科書を作りたいという思いをもって、毎年何人もの新人が入社してくれます。「子どもたちに、知ることの楽しさや、できたことの喜びを伝えたい」と目を輝かせる彼らに、毎年同じ質問をします。

「教科書と一般書の違いは何だろう」。そうきくと、いろいろな答えが返ってきます。「教科書には、検定制度がある」「改訂の時期やサイクルが決められている」「学習指導要領をもとに作られる」。どれも正解です。ですが、自分は「作る側の言い分ではなく、読者の立場で考えたらどうだろう」とさらにきくようにしています。

一般書の読者は、その本を読むかどうかを自分で決めることができる。図書館や本屋にある一冊を手にとって、そこで読むか読まないか、買うか買わないかは自分が決められる。読み始めても「つまらない」と思ったら、そこでページを閉じることもできる。

でも、教科書は違います。授業の始まりに「さあ、〇ページを開いて」と先生に言われて、「僕は開かない」と言える子がいるのでしょうか。もしかして、心の中で「つまらない」と思っていたとしてもです。

「大事なことが書いてあるから」という理由だけでなく、どの子にも「早くページを開きたい」「もう一回開いてみたい」と思ってもらえる教科書。それを実現するのは簡単なことではないし、何度改訂に立ち会っても、そうそう成功したわけではありません。だけど、教科書作りを目指す新人たちには、それに挑む気持ちをもち続けてほしいと思います。

自分自身を振り返って、そのことを強く意識するようになったきっかけの一つに、平成5年度版英語教科書『COLUMBUS』が創刊された時に聞いた東後勝明先生（当時の代表編集委員）のお話があります。

「先生がポケットからペンをとって、What's this? と尋ねる。生徒の答えは、It's a pen. これって、おかしくないですか。だって、先生は答えを知ってい

るのに『これは何ですか?』って尋ねるんですよ。普段の生活で、こんなやり取りはしないでしょう。英語だから、外国語の勉強だから、これでいいんだと、あなた、そう思いますか?」

それまで考えたこともありませんでしたが、確かにそれでいいとは思わないし、英語の授業だから、知らない言葉を勉強するんだから「仕方ない」と言うてはいけない。そんな思いを強くもちました。

『COLUMBUS』は、平成14年から『COLUMBUS 21』に、令和3年から『Here We Go!』と書名を変え、時と共に、多くの子どもたちが手に取ってくれるようになりました。

「英語の授業を見学したら、グループに分かれた子どもたちが、教科書を見ながら、本当に楽しそうに話し合っていた」

「そうね。『ティナのこの気持ち、よくわかるなあ。わたしにも経験があるから』って言っていた子がいた」

「英語の教科書なのに、『この英語がわかる』じゃなくて、『この気持ちがわかる』なんて、ちょっとうれしいよね」

入社して何年か経った若手社員から、そんな言葉を聞くと、こちらまでうれしくなります。

ページを開く子どもたち一人一人の表情を想像しながら、あれこれ試して、工夫して、またやり直して……。創刊以来、ストーリーの可能性を信じて、子どもたちに「開いてみたい」と思ってもらうための挑戦が続いています。

だからこそ、教科書作りはおもしろい。ずいぶん長くこの仕事を続けていますが、そんな思いは今も変わりません。

光村図書出版株式会社
代表取締役社長
吉田直樹

